

神 Deva と呼ばれた仏陀

杉 本 卓 洲

1

仏陀が宗教的人間として、日常的次元を超越した人として見られるようになったのは、何時頃からであろうか。それは彼の在世中に、すでに始まっていたのであろうか。この問題は仏教を宗教として把える時、重要なポイントの一つと言える。いわゆる原始仏典と称せられる文献の中には、仏陀の弟子となった人々が、仏陀に対して限りなき称賛を与え、その中で彼を、人間以上の人格として崇敬している例が認められるが、それが事実とすれば、仏陀の超人化は、そう新しいことではなかったものと想像される。

たとえば、Majjhima-nikāya (I.386) には、持戒者として有名な Upālī が、Nigaṇṭha Nāthaputta から汝は誰の弟子かと問われたのに対して、自分は仏弟子であり、仏に対しては無数の称賛 (aneka-vaṇṇa) が可能であるとして、百種程の形容語でもって、仏陀を称揚しているのが見い出される。その主なものを拾いあげてみると、仏陀は無比 (anopama)、無上士 (anuttara)、光明の作者 (pabhāsakara)、ナーガ (Nāga)、梵天に到達した人 (Brahmapatta)、城塞の破壊者なるサッカ (Purindada Sakka)、自ら度脱し己り他を度脱せしめる者 (Tiṇṇa Tārayanta)、比類なき人 (appaṭipuggala)、供養されるべき人 (āhuneyya)、ヤッカ (Yakkha)、最上なる人 (uttamapuggala)、無等なる人 (atula) である、といったような呼び方がなされている。⁽¹⁾

また Thera-gāthā においても、Kaḷudayī 長老の如きは、仏を「神々の中の神 (Devadeva)」、「無比なる放光者 (appaṭima Aṅgīrasa)」と呼び (G. 533; 536)、Sarabhaṅga 長老も、自分は「神を超えたる人 (Atideva)」によって病患 (roga) を見る事が出来たと謳い (G.489)、Vaṅgīsa 長老にいたっては、仏を Nāga と呼び、大雲の如く弟子たちに雨降らすとし、Aṅgīrasa にして Mahāmuni なる方は一切世界を輝かしたと賛じ、最後に「神々の中の神 (Devadeva)」を はれ我れせん、との言葉でもって結んでいる (G.1240; 1252; 1279)。

これらの例から知られるように、仏陀は在家の信者たちではなく、直接の弟子、しかも出家の比丘たちから神に近きもの、更には神をも超えた者として崇められたわけであり、特筆すべき点と言える。ところが、不思議なことに、仏陀がそのまま神 Deva と呼ばれる例に遭遇することがなく、⁽²⁾ 問題に直面させられる。

そこで、ここでは、実は仏陀が神 Deva と呼ばれた例もあることを指摘し別の観点から検討を加えてみたい。そしてそれがインド文化史の中でどのような問題をもつか、といった面についても少しく論及を進めてみたいと考える。

●(注)

(1)漢訳の対応部分(大正1, 632b~c)には *Tiṇṇa Tārayanta, Yakkha* に当る言葉が見当らない。

(2)仏陀は *Yakkha* や *Nāga* の如き神霊とみなされ、後には神々よりはるかにすぐれたものと考えられたが、*Deva* と呼ばれることはなかった。中村元「インドにおける神と仏の交流」(『仏教思想史1<神と仏 源流をさぐる>』平楽寺書店, 1979) pp.47~127.

2

Bharhut の欄楯の Medallion の一つに、写真にみられるような内容をもつ彫刻が得られる。



From Indian Archaeology 1960-61; A Review.
Plate LXXXVII B.

即ち、荒れ狂う海原で大きな魚が口をあけ、人々の乗った舟を呑み込もうとしているところ、上方に同じ舟が再び表わされ、人々が合掌しながら乗船して去る、という光景が描かれている。この図の上には碑文が刻まれており、Lüders の Transcription によれば、

tiramitimīṅgila kucchimhā Vasugutto mochito Mahādevānam
(timitimīṅgila kucchimhā Vasugutto mochito Mahādevēna)
と読まれ、

「Vasuguta (Vasugupta) は Mahādeva によって、大海の怪魚 Timitimīṅgila の腹から救われた。」
という意味に解される。⁽¹⁾

しかし、この碑文の読み方については学者間に異同があり、最初の三字 tirami をどのようにとるかが問題となる。そのままにとると、

「Vasuguta (Vasugupta) は Mahādeva によって、海の怪魚 (Timitimīṅgila) の腹から岸に (tirami) 救われた。」

となる。事実、Lüders も曾てはこのように訳しており、それを採用する学者が多いようである。⁽²⁾しかし、Sircar によれば、ti と mi との間の ra は文字ではないようであり、Timitimīṅgila と繋ぐ方が良いとされ、Lüders の括弧内の読み方の如くなるわけである。また最後の Mahādevānam (複数、属格) というかたちは、具格の意味で用いられているとされる。⁽³⁾ 今はこの説に従って論を進めてゆくことにする。

次にこの図の内容比定に関しても、すでに多くの学者によって試みられ、Mahāvastu, Divyāvadāna, Avadāna-śataka, Avadāna-kalpalatā を始め、漢訳仏典の『六度集経』『雜譬喻経』『賢愚経』『撰集百緣経』『分別功德論』『大智度論』等に見られる一挿話に対応を求めることが出来る。

今それらの話を、各々簡単に紹介してみよう。

【1】 Mahāvastu (Senart ed. I.245)

Thapakarni (後では Sthapakarṇika と出る) と名づく Gṛhapati が五百人の仲間と共に、大魚 Timitimīṅgila の住む海に舟に乗って出かける。するとその大魚に舟が呑み込まれそうになり、皆は死の恐怖にうちひしがれ、各自自分の信ずる神に助けを求める。ある者は Śiva, ある者は Vaiśravaṇa, ある者は Skanda, ある者は Varuṇa, ある者は Yama, ある者は Dhṛtarāṣṭra, ある者は Virūdhaka, ある者は Virūpākṣa, ある者は Indra, ある

者は Brahmā, ある者は Samudradevatā に祈りを捧げる。しかし何らの効果もない。

その時、その有り様を、Tundaturika と名づく山中に住していた Pūrṇaka 尊者 (āyusmat) が天眼でもって見つけ、神足にて空中を飛来して彼らの船上に至る。皆は合掌して「世尊よ、世尊よ、我ら汝に帰命せり (bhagavaṃ bhagavaṃ tava śaraṇagatā sma)。」と言って救いを求めるが、Pūrṇaka 長老 (sthavira) は自分は Bhagavat (世尊) ではなくて Śrāvaka (声聞) であると言って、彼らに声を合わせて “namo buddhasya” (南無仏) と唱えるように勧める。そこで皆が一声に “namo buddhasya” と叫ぶと、大魚 Timitimīṅgila は仏陀の名を呼ぶ声を聞き、前世において自分は Meghadatta という名で、Dīpaṃkara 仏に授記された Megha の弟であったが、父や比丘を殺したり、仏を傷つけたりしたことによって魚として再生したことを想起し、今仏陀がこの世に出現したことを知って口を閉じる。それからは何も食べることなく、死んでバラモンの若者 Dharmaruci として再生する。

そして、最後に「このように比丘たちよ、仏を呼ぶ声は空虚ではない (āmogho buddhaśabdo)。苦の滅するまで転ずる (yāvad-duḥkhaḥṣayāya saṃvartati) ものである。」と結ばれる。(4)

【2】 Divyāvadāna (Vaidya ed. pp.142~144)

五百人の商人が種々の財宝を求めて、恐怖に満ちた大海へと船出する。海中で彼らは二つの太陽の如き眼をもつ大魚 Timitimīṅgila に出会うが、彼らの船はその大魚の口の門の中に吸い込まれそうになる。その時、船師 (karaṇadhāra) は「これは Timitimīṅgila による恐怖です。水より上にもり上った山の如きものが彼の頭であり、赤珠の羅列 (lohitikā rājī) が彼の唇であり、白い環 (avadātā mālā) が彼の歯の環であり、遠くからでも太陽の如く見えるものが彼の眼の瞳孔です。最早や我々はこの恐怖から逃れ得る手だて (upāya) はありません。我々すべては死に瀕しています。あなた方が信仰 (bhakti) を捧げている神々に救いを求めなさい。そうすれば、いずれかの神が我々をこの大なる恐怖から解放してくれるでしょう。この他に生きながらえる何らの手だてもありません。」と言う。

そこで商人たちは、死の恐れに打ちひしがれながら、Śiva, Varuṇa, Kubera, Mahendra, Upendra 等の神々に、生命の救助 (jīvita-paritrāṇa) を求めて祈願を始める。しかし何らの利き目もない。彼らの乗った船は大波によって投げ出され、大魚の口の門の中に運び込まれそうになる。

ところがそこに、一人の Upāsaka が乗船しておって、商人たちに「私たちはこの死の恐怖から最早や脱することは出来ません。すべて我々は死ぬ他はありません。しかし皆で一声に “namo buddhāya” (南無仏) と唱えてみませんか。死ぬ時には仏に依止し、〔仏を〕念じて死ぬことにしましょう (sati maraṇe buddhāvalambanayā smṛtyā kālaṃ kariṣyāmaḥ)⁽⁵⁾ 善趣への到達がありましょう (sugati-gamanam bhaviṣyati)。」と言う。そこで商人らは一声に “namo buddhāya” と祈り (pranāma) をなしたところ、その声が祇園精舎 (Jetavana) に住んでいた世尊によって、清浄にして世人を超出した (atīkrānta-mānuṣa) 天耳 (divya śrotra) でもって聞かれ、彼らの叫び声が、その大魚に聞かれるようにし向けた (adhiṣṭhita)。

大魚はその “namo buddhāya” という声を聞いて、心に不快 (amarṣa) を生じ、憂悩なる状態 (viklavī-bhūta) になった。「ああ、仏が世に現われた。仏・世尊の名を称える声 (udghoṣa) を聞きながら、食物をとることは私にとって適當ではない。私が急に口の門を閉じたならば、船の破壊と多数の生命の破滅があるだろう。私は緩やかにゆっくりと口の門を閉じることにしよう。」と言って、大魚は口をしずかに閉じたので、船はその大きな肉食獣 (grāha) の口から離れ、適宜なる風に吹かれて岸に到着する。

商人たちは将来した財宝をもって Śrāvastī に到り、航海の成功は仏の名号を唱えたことによるとして、財宝を仏・世尊に捧げる。仏が彼らに出家を勧めると、皆は自分らの生命は仏・世尊の威力 (tejas) によるものだと言って、財宝を父母、妻子、召使いなど、親族や眷属のものに分ち与えて出家する。そして勇猛精進して、阿羅漢位を証得するに至る。

【3】 Avadāna-śataka (Speyer ed. II. 60~65)

ある商人が妻を連れ、五百人の仲間と共に航海に出て、海中にて一人の子を得る。そこでその子の名は Samudra と名づけられた。Samudra は航海に出ては珍宝を得て来て、町や村でそれを売って非常な金持ちとなった。彼はある時、五百人の仲間と共に大海に出るが、大海の真中に至った時に黒風 (kālikā-vāta) によって船は木の葉の如くゆらされた。商人 Samudra はその時外道の信奉者 (tīrthikābhiprasanna) であった。死の恐怖にさらされて、彼は六人の師 (śāstr) たちに祈願し始めた。しかるに、船は依然として風にゆらがされるのみであった。他の商人たちは、Śiva, Varuṇa, Kubera, Vāyu, Agni, Mahendra, Bhuvī, Tuvimagha, Viśvadeva, Maharṣi 等の神々に救いを求めたが、⁽⁶⁾ 何の益もなかった。

ところが、その中に一人の Upāsaka が居って、仏・世尊こそ我々の救助者 (trātr) となろうと言ったので、Samudra を先頭に五百の商人たちは声を合せて (ekaraveṇa) “bhagavantam śaraṇam” (世尊に帰命す) と言って保護を求めた (prapanna)。仏・世尊こそ「大悲をもてる者」(mahākāruṇika), 「世間饒益に發起する者」(lokānugraha-pravṛtta) である。彼らが災難に遭っているのを知って、仏は Jetavana に住んでおったが、そこから光明を放ってその黒風を鎮めたので、彼らは無事に岸にたどりつくことを得た。そこで彼らは仏前にて出家し、一切の煩惱を断じて阿羅漢位を証得するに至る。

【4】 Avadāna-kalpalatā (Vaidya ed. p. 504)

海中に財宝を求めに出かけた商人たちは、有情の帰滅をもたらす Timiṅgilagili なる魚に遭う。失神状態にされたかの如く、大海の中を漂う。この恐るべき世界の滅尽をもたらすものの眼は、二つの太陽の如く、齒の列は大きな山の頂きの環の如くである。船は流れるままで、丁度心が快樂に向って維持出来ぬが如くである。皆は繁栄せる死後の生存を求めて、神 (devatā) を念じた。しかし、何らの報いもなく、結果は死へと転ずるのみである。

船師の言にしたがって、商人たちは “namo buddhāya buddhāya” と共に叫び、声を挙げた。これら恐怖に陥ち入れる者たちの叫びを、生類に安寧をもたらす方 (Bhūta-bhāvana), Jetavana に住んで居られた勝者 (Jina) なる世尊は聞かれて、大魚が仏名 (buddhābhidyāna) を聞いて暗闇の息滅 (tamaḥ-praśamana) をなすようにし向けた。魚が徐に口を閉じたので、有情への災難は鎮まった。船は漸く迅速なる激流の災禍から護られ、黒き口より解かれた。

それから、安寧を得たるすべての者は、大いなる恐怖より度脱し終えて、Śrāvastī に珍宝を満載して名声高く入城した。彼らは厄難よりの救護者 (vyasana-trāṇakārin)・Jetavana に居られる勝者・世尊の許に行き礼拝した。そして、世尊の教えの下で輪廻の繫縛を断じ、即座に淨信 (prasāda) を得て出家し、阿羅漢位 (arhattva) に到達した。

【5】 六度集經卷四 (大正 3, 19a)

昔、菩薩は貧人となり、商人のための賃仕事をなす。利を得ようと海に入るが、船が進まなくなった。商人たちは大いに恐れ、みな神祇に祈った。しかし貧人の菩薩はただ三帰依をなし、戒を守り、過ちを悔いて自らを責むること三日三夜、慈心をもって誓願をなした。「十方衆生が我の今日ある如く

恐怖なからんことを。吾れ後に仏となり得た時には、この者たちを度せん。」と。

七日を過ぎても船は進まなかった。海神が貨主の夢に現われて、貧人をすれば船を進めてあげようと告げる。貧人はそれを知り、「吾が一人の体をもって衆命をうしなうことなかれ。」と言って、すて去られることを甘受する。そこで貨主はいかだ（籊＝籊）を作って、彼をそれにのせ、ほしい（猴＝候）を与えて遠くへ放つ。

大魚が船をくつがえして、尽く商人たちを呑み込んでしまった。貧人は風のふかれるままに岸にたどりつき、本土に還ることを得る。

菩薩の執志度（śīla-pāramitā）は無極である。持戒を行ずること、是の如きであった。

【6】 比丘道略集 雜譬喻經，衆經撰雜譬喻卷下（大正4，529a-b, 537b）

昔、五百の商人が船に乗って海に入り、珍宝を求めに出かける。摩竭魚（makara）に出会う。船の進むこと疾く、帆は何らの利き目もなくなった。商主が樓上の者に何ごとかと問うと、上に二つの太陽の如き、下に白山、中に黒山の如きものが見えろとの答え。商主はこの大魚の腹に入れば、活くことは出来ない、とて、皆に信ずるところの神に一心に帰命し、この難より脱するように勧める。しかし、祈れば祈る程船は疾くなるばかり、まさに魚の口に入れられるのみとなる。

そこで商主は皆に告げて言う。「我に大神あり。号して名づけて仏と為す。汝ら各もと奉ずるところ（挙ぐるところ）を捨て、一心にこれを称えよ。」五百人の者はともに大声を発して、「南無仏」と称えた。魚は仏の名を聞いて自ら思惟するに、「今日世間にまた仏あり。我まさに何ぞ忍びて衆生を傷害すべけんや。」と。魚は口を閉じたので、水は逆流し、魚の口より遠のき、難を脱することが出来た。

この魚は前身が道人であったが、罪をなしたことによって魚の身（形）を受けた者であり、仏名の声を聞いて宿命を尋憶し、善心を生ぜしめたのである。

以上のことは、五百の商人がただ一心に仏を念じ、名号を称えた結果、彌天の難から解脱し得たことを明かすものである。念仏三昧を受持することは更によきことである。重罪をも薄くせしめ、薄き者をば滅せしめる。(7)

【7】 賢愚經卷四，卷六（大正4，379b，394b）

この經典からは二つの例が得られる。

①五百の商人（估客）が海に入り宝を採りに出かけ、摩竭魚（曇摩苾提という名の王の生れ変れるもの）が口を張っているのに値う。船が吸い込まれ、商人たちは恐怖のあまり声を挙げて哭く。我らは今日決まって死ぬであろうとて、各自敬えるところの仏・法・衆僧を称え、あるいは諸天、山河鬼神、父母、妻子、兄弟、眷属を称える。いよいよ魚の口に入らんとする時、一時に同声に「南無仏」と称えた。魚はこの声を聞いて即時に口を閉じた。海水が停止し、商人たちは死より脱するを得た。その魚は食物を採らず、飢えのため命終した。

②富那奇と名づく長者の子が、五百人の商人とともに、兄の許しを得て航海に出たが、宝を得て帰る途中、摩竭魚に会う。みんなは導師に太陽が三つ見えるが何であるかと問うと、「一つは本当の太陽、二つは大魚の両眼である。その間の白いものは魚の歯であり、黒冥のところは魚の口である。我らはもはや活路はない。魚の口に入り死ぬばかりである。」と言う。

その時一人の賢者があって、仏道を敬信する者で、皆に告げて言うのに「ただ当に虔心に南無仏と称えるべし。三界に徳の大なる、仏に過ぐる者なし。厄を救い、急に赴むき、一切を矜濟す。最も能く苦厄の衆生を覆護す。ただ仏のみ神聖なり。願わくは危険を救い、この諸人の毫釐の命を済いたまえ。」と。

摩竭魚は仏名を称えるのを聞いて、ただちに口を閉ざし海底に沈みかくれたので、皆は安穩に国に還るを得た。

富那奇は将ち来った財宝を兄に奉じて、出家することの許しを乞うた。兄は富那奇が年少で、未だ人倫に達していないこと、仏法の重きこと、持つことの甚だ難きこと等を理由に許さなかったが、富那奇が、大海にて摩竭魚に値い死ぬばかりであったのに、仏の神恩を蒙って命を得たことを話すと、兄は承諾する。富那奇は舍衛国の仏のところに到り、仏の許にて出家し、沙門となる。

【8】 撰集百緣經卷九（大正4，244b）

五百の商人が大海に入り、珍宝を採取せんとする。その時商主は妻を伴って行くが、海上にて子を生む。その子は海生と名づけられるが、年の長じると大海に入り、珍宝を得て帰る途中大黒風に値う。船は吹かれて羅刹鬼の国にただよい着かされんとする。商人たちは各自諸天善神を跪拝したが、少しも感応なく、その厄難から救われることがなかった。

ところがそこに優婆塞がおって、商人たちに語って言うのに、「仏・世尊あり。常に大悲をもって昼夜六時に衆生を觀察し、苦厄を受くるを護り、すなわち往きてこれを度したまう。汝ら当にかの仏名を称うべし。或いは能くここに来りて、我らの命を救わん。」と。

そこで商人たちは、同時に「南無仏陀」と称える。世尊ははるかに商人たちが厄難に遇っているのを見て、光明を放って黒風を照らすと、風は消滅し、みな解脱を得る。皆は仏の威光を蒙ってこの諸難を脱して、今平安に到達し得たのであるとして、仏と僧のために塔寺を造立する。そこに仏と僧を請じ、饍饍を設けて供養し、仏の説法を聞き、最後に仏前にて出家し、阿羅漢果を得るに至る。

【9】 分別功德論卷四（大正25, 45b）

これは曇摩留支（Dharmaruci）が、「遠遊を好む第一者」であった理由を説明するために語られるもの。

仏が過去世において、定光仏の前で超述という名の梵志であって、仏の足の汚れるのを恐れて、髪を解いて泥上にしいて、仏に踏ませ過ぎさせた。それによって彼は、未来に仏になろう、との授記を受けた。その時、同じ梵志で超述に悲心を起し、この者は畜生と異ならないと言って、髪の上を踏んで行った者があった。彼はそれ以来畜生に生れて、大海の中にあって摩竭魚となった。長さが七千由延（yojana）もあった。

その時五百の商人が船に乗り、海に入って宝を採ろうとして、この大魚に値った。船はその大魚の口の中に入りそうになる。皆は怖れて、各自つかえているところの神々の名を称えた。

その時商主はみんなに「今世に仏ありて釈迦文と名づく。人の危厄を済うや、復これに過ぐるなし。我ら称名して、冀わくは蒙りて脱するを得ん。」と言う。そこで皆は声を合わせて称名をなした。

魚は仏の名を聞いて、釈迦文仏が世間に現われたこと、我が身が何故に魚であるかを自ら惟って、海水の中に没する。五百の商人は安穩に帰るを得る。魚は半身を沙壇の上に出して、飲まず食わず経ること27日間、命終する。長者の家に再生して、曇摩留支という名をつけられる。彼はそこで仏と見えることが出来た。

彼は海辺で自分の屍を見つけて、その上に華を散じてやった。このようにして自分のことを尋ね惟いて、忽然として道を成じた。この因縁をもって、彼は「遠遊第一」と称せられるようになったのである。(8)

【10】 大智度論卷七（大正25, 109a）

「念仏三昧は大福德ありて能く衆生を度す。」「諸余の三昧にて、この念仏三昧の福德、能く速やかに諸罪を滅するが如きものなし。」ということ为例示するものとして語られる。

昔、五百の商人（估客）が海に入り宝を採るに、摩伽羅魚王の口の開くのに値う。海水が船中に入り、船の走ること駈疾となる。船師が樓上の者に何が見えるかと問うと、三つの太陽と白山の羅列が見え、水流の走り赴くは大坑に入るが如くであるとの答え。船師は「これは摩伽羅魚王が口を開いていることであって、一つは実の太陽、二つは魚の眼、白山は魚の歯であり、水流の走り赴くはその口に入ることを示すのであって、我々はその難に遭っているのだ。」と言って、各自諸の天神に自らの救済を求めるように勧める。しかし、すべて益がない。

その時船中に五戒を受持する優婆塞が居って、皆に「吾等当に共に南無仏と称えるべし。仏は無上にして、能く苦厄を救う。」と言う。そこで皆は一心同声に南無仏と称える。

この魚は先の世において仏の破戒の弟子であったことを想起し、仏を称える声を聞いて、心自ら悔悟して口を合わせる。船中の人々は難を脱するを得た。

念仏をもつての故に能く重罪は除かれ、諸の苦厄は済われたのである。まして念仏三昧は尚更のことである。⁽⁹⁾

【11】 大悲經卷三（大正12, 957a-c）

仏名を聞く者は、畢定して般涅槃に入ることを説くもの。

過去に大商主あり、諸の商人を将いて大海に入る。海中にて船が摩竭大魚により呑み込まれそうになる。商人たちは驚いて、恐怖のあまり皆悲しみ歎き、もう父母、兄弟、姉妹、婦兄、親戚、朋友とも別離せねばならぬ、仏・法・衆僧にも見えることが出来なくなるとて、大いに悲しんだ。そして各自諸尊神天（天神）に祈り、自らの救いを求めた。

その時商主は正見明達の者であり、仏・法・僧に浄信を得、諸余の天神を信じぬ者であった。仲間に自分に従うように命じた後に、偏袒右肩をなし、右膝を地に著けて、船上において一心に念仏し、合掌礼拝して高声で「南無諸仏、得大無畏者、大慈悲者、憐愍一切衆生者。」と三返称えた。商人たちも応じた。

すると摩竭魚は仏の名号、礼拝の音声を聞いて、大なる愛敬を生じ不殺の心を得た。口を閉じたので、商人たちは皆安穩に魚の難より免れるを得た。

魚は食をとらずに死んで人中に再生し、仏より聞ける法と毘尼（律）において出家し、阿羅漢道を得、六通を具足し、無余涅槃界に般涅槃した。

以上11種の例をあげたが、この他に『経律異相』にも同様の物語を見ることが出来るが、⁽¹⁰⁾ これは【6】を再録したものと考えられ、ここでは省略することにする。⁽¹¹⁾

さて、以上の諸例を Bharhut の彫刻及び碑文の内容と照合してみると、次のようになる。

まず第一に、彫刻図においては Mahādeva によって救われたとあるのに対して、文献においては「南無仏」との称名、念仏によって、とされる場合の多いことが注目される。しかし【6】の例から、商主の言う「我に大神あり。号して名づけて仏と為す。」⁽¹²⁾の言葉から、Mahādeva とは仏陀の異名であることが知られ、両者を同一視することが可能となる。

仏陀が Mahādeva と呼ばれたことは、Bharhut の別の碑文、
Bahuhathika āsana bhagavato Mahādevasa

「世尊、Mahādeva の、多くの象の（かしずく）座」⁽¹³⁾

という文の見られることから証明され、仏陀が明らかに Mahādeva と呼ばれたことを知る。

次に、船を襲う大魚の名は【1】及び【2】では Timitimīṅgila とあり一致を見るが、多くは Makara（摩伽羅）とあって相違が認められる。Divyāvadāna によれば、⁽¹⁴⁾ 魚・亀・怪魚・わに・マカラ等（matsya-kacc-hapa-vallabhaka-śuśumāra-makarādi）は Timīṅgila なる魚の口の門を通して腹の中に落ち込むと言われ、Timīṅgila より Makara は小さいものとされる、更に Timitimīṅgila は Timīṅgila より大なるものであるもので、両者の同一視はより困難となる。しかし、Mahāvastu には、Timimakara とか、Makarā-(timi)timīṅgilā なる言葉が見え、⁽¹⁵⁾ 両者は同種類に属するものであることが想定され、大きな問題とはならないようでもある。ただ【3】及び【8】において黒風（大黒風）とあるのは彫刻の内容とは対応せず、この点では考察の外に置かれるべきかもしれない。

第三に、物語に登場する人物の名前であるが、仏典では Thapakarni (Sthapakarṇika), Samudra, 富那奇 (Pūrṇaka), 海生 (Samudra) 等とあり、碑文の Vasuguta (Vasugupta) と対照させることが不可能である。しかし、経典自体の中にあっても互いに一致せず、登場者の名前に関しては

物語作者の自由にまかされていたとしか言いようがない。したがって、碑文上の Vasuguta (Vasugupta) なる人物の詮索もあまり意味のある作業とはならないようである。

●(注)

- (1) H. Lüders (ed.), *Bharhut Inscriptions. Corpus Inscriptionum Indicarum*. Vol. II. Part II. Ootacamund 1963. pp.155~158. B62 (881), pl. X X I, X L III. この彫刻はベナレスの Bhārat Kalā Bhavan に1959年より収蔵されていたと言われるが (cf. *Indian Archaeology* 1959-60, A Review. New Delhi 1960. p.82. Ibid. 1960-61. A Review. New Delhi 1961. p.74. pl. L X X X V III), 筆者が1966年6月にベナレス・ヒンドウー大学 (BHU) を訪れた際に College of Indology に棟続きの Museum (No.21485) に “Timingala Jātaka (Crossbar of Stone Railing), Previous birth story of Buddha-encounter with the Timingala demon in the form of a whale. Date 2nd cent. B. C. Bharhut.” なる説明文が付されて展示されていた。尚、この彫刻及び碑文については、A. Cunningham, *The Stūpa of Bharhut*. Ind. Repr. Varanasi 1962. p.142. No.66. pl. X X X IV. fig.2. E. Hultzsch, *Bharhut Inscriptions*. I A. Vol. XXI. 1892. p.239. No.159. B. M. Barua, *Bharhut*. Repr. New Delhi 1979. Book. II. pp.78~81, A. Foucher, *Les vies antérieures du Bouddha*. Paris 1955. pp.50~55. 小野玄妙『仏教之美術及歴史』(仏書研究会・大正5) pp. 342~344. 同『仏教美術講話』(甲子社・昭2) pp.204~205. 逸見梅栄『印度古代美術・資料と解説』(第一青年社・昭15) p.206. 図238. 干潟龍祥『改訂増補版・本生経類の思想史的研究, 附篇 本生経類総合全表』(山喜房・昭53) p.4. 高田修「パールフットの仏教説話図」(『美術研究』242号, 昭40) p.107 (27頁), No.13. 静谷正雄『インド仏教碑銘目録』(平楽寺書店・1979) p.24. No.362.
- (2) H. Lüders, *A List of Brahmi Inscriptions. Appendix to EI. Vol. X. 1912. p.89. No.881. “Vasuguta (Vasugupta) rescued to the shore by Mahādeva from the belly of the sea-monster.”* Do., *Bhārhut und die Buddhistische Literatur*. Leipzig 1941. SS. 73~79.
Hultzsch, “Vasugupta is rescued from the belly of the Sea-monster (and brought) on shore by Mahādeva.”
Barua, “Vasugupta is brought ashore, being rescued from Timingila’s belly by the power of the name of the mighty lord.”
逸見「ヴァスグプタはマハーデーヴァ (の称名) に依りて摩竭魚の腹中より救われ岸に (運ばれたり) 。」
高田「Vasuguta (Vasugupta) は Mahādeva [のおかげ] により, 怪魚の腹中から救われ, 岸に運ばれた。」
静谷「Mahādeva により海の怪物の腹から海岸へ救助された Vasuguta」
- (3) H. Lüders (ed.), *Bharhut Inscriptions*. p.155. note 1.
- (4) Mvu. III. 67~90 には, 五百の商人の乗った船が, Makara によって破壊され, Rākṣaṣī の住む島につく話が載るが, その際に彼らが Śiva, Vaiśravaṇa, Skanda,

- Varuṇa, Kuvera, Śakra, Brahmā, Diśadiśā 等に生命の安全を祈っているのが見られる。しかし、仏への祈願は関説されていない。
- (5) Divy. 143. 31~32, また別の箇処 (123. 27~28) にも, 二匹の鸚鵡のひなが仏・法・僧に依止し, 念じながら死んで (Buddha-dharma-saṃghāvalambanayā smṛtyā kālagata), 四大天王天に再生したことが物語られている。
- (6) この部分は次の如き偈頌 (62.5~63.2) となっているが, 理解し難い。
 Śiva-Varṇa-Kuberā Vāyur-Agnir-Mahendro Bhuvi ca Tuvimagho <yo>
 Viśvadevo Maharṣir/ vayāmaha maraṇārtā vaḥ prapannāḥ sma śīghraṃ
 vyasanam-idam-upetaṃ trātum-icchantu sārtham //
 Tibet 語訳 (北京影印版『西藏大藏經』Vol. 40. 220-1-7~8 [224b⁷⁻⁸]) との対応もあり明確でない。
 gu lañ chu lha ku be ra dañ rhuñ lha me lha dbaṅ chen dañ /
 dran sroñ sna tschogs lha dañ sa la gnas paḥi glu mdsa de dag la /
 bdag cag dad pa lags kyis bdag cag ḥi ṇan ḥchi ba ḥi gnod gyur lags /
 myur du sdag ba sña la ḥdi dag bsal te ḥdron bo rnam na bsgrab par gsol //
 特に Bhuvi と Tuvimagha なる神が Tibet 語訳の sa la gnas paḥi glu mdsa に
 当るようだが, 明らかになし得ない。cf. J. S. Speyer, Avadāna-śataka, S'-Grav-
 enhage 1958. II. p.62, n. 6. p.63, n. 1&2.
- (7) 最後の文は「如此之応未足為多。」(大正4, 529b 8行), 「足以為驗也。」(同, 537b最
 終行) とあるが, 解し難い。
- (8) Pāli の Apadāna (II.429~431) にも Dhammaruci 比丘の話 (No.486) があり, 彼
 は Timingala という大魚となり船を食べようとしたが, 商人たちの “Gotama よ”
 と叫ぶ大声を聞いて前世を想起したことが説かれている。彼は Dīpaṃkara 仏の時
 代に Megha と名づく青年であったが, 母を殺傷したことで Avīci 地獄におち, 魚
 として生れたものであって, Gotama の名を呼ぶ声で目覚め, 人間として再生し, 仏
 の説法を聞いて阿羅漢になったと言われる。
- (9) cf. É. Lamotte, Le traité de la grande vertu de sagesse de Nāgārjuna.
 Tome I. Louvain. Réimpr. 1966. pp.410~414.
- (10) 『経律異相』巻43 (大正53. 226b)
- (11) 内容を異にするが類似の点の認められる物語として, 『生経』巻4 (大正3, 96a~b),
 Divy. p. 25. 『根本説一切有部毘奈耶薬事』巻3 (大正24, 12c~13a), 北京影印版『西
 蔵大藏經』Vol. 41. p.117 (Khe 287a⁵~288a³), J. No.190. Sīlānisaṃsa-j. (II. 111
 ~115), J. No.442. Saṃkha-j. (III. 16) 等があげられる。
- (12) 『経律異相』巻43 (大正53, 226b) にも「我有大神, 号名為仏」の言葉が見られる。
- (13) この碑文は Cunningham による eye-copy のみで知られるもので (A. Cunningham,
 op. cit. p.143. No.19 pl. LVI), 彫刻等については明らかでない。bahuhathika につい
 ては学者の間で解釈を異にするが, 今は Lüders 及び Barua の説に従う。H. Lüders,
 op. cit. p.180. B81(902), pl. X XIII. B. M. Barua, op. cit. I. p.63. II. pp.165~
 167. cf. A. Hultsch, op. cit. p.239. No.160, 静谷正雄, 前掲書, p.25. No.395.
- (14) Divy. p.142. 1.12. cf. 『十誦律』巻25, 33 (大正23, 178c; 239c).
- (15) Mvu, III, 355. 10; 454. 3.

3

仏教用語の代表的な集成本とも言える Mahāvvyutpatti の冒頭には、仏陀の名号として81種もの異名があげられている。ところが、それらの中に Mahārṣi とか Mahātmā といった名は見い出されるものの、Mahādeva なる呼称は得られない。⁽¹⁾このことは、仏陀が仏教徒たちによって Mahādeva と呼ばれた例が殆どなかったのではないか、ということを想定させる。

そもそも Mahādeva とは、バラモン系乃至ヒンドゥー系の神自体、もしくは特定の神の呼称である。それを示すものとして、次の如き例をあげることが出来る。

先ず古くは Atharva Veda において、Mahādeva は Soma, Varuṇa, Mr̥tyu, Indra と並挙され、神々の軍隊 (devasenā) によって敵に打ち勝つことを願って祈られていたり、別に Aryaman, Varuṇa, Rudra と列挙されて崇拝を受けているのが見られる。⁽²⁾

Āśvalāyana-gr̥hyasūtra には、Rudra 神に牛を犠牲獣として献ずる Śūlagava-yajña という特異な祭式が記されているが、殺された牛の臓物を 皿 (pātrī) 或いは木の葉に載せて捧げる際に、

“Harāya Mr̥ḍāya Śarvāya Śivāya Bhavāya Mahādevāya
Agrāya Bhīmāya Paśupataye Rudrāya Śaṅkarāya
Īśānāya svāhā”

と12の神々の名前から成る mantra を唱え、規定されているのが見られる。⁽³⁾これらの名は Rudra 神の異名とも考えられ、Śiva も Mahādeva も、その一つとして含まれているのが知られる。

同様に、Kauśika-sūtra においても、家畜の安寧なることを求めて、Bhava, Śarva, Paśupati, Ugra, Rudra, Mahādeva, Īśāna なる神々の名が列挙され、祈られている。⁽⁴⁾これらは厳密に言えば同一の神格を種々の異名で呼んでいるのか、また別々の神格なのか判別し難いが、後の Viṣṇu Purāṇa などには、明確に Rudra に7種の名ありとして、Bhava, Śarva, Īśāna, Paśupati, Bhīma, Ugra, Mahādeva があげられ、⁽⁵⁾ Rudra への帰一化が認められるようになる。

しかしながら、Rudra という名は後に Śiva の名に置き換えられ、ヒンドゥーの主要神の位置を確立するに至る。こうなると、上でみた神々の名も Śiva 神の異名となり、Mahādeva という名も当然 Śiva を指すこととなっ

て、Śiva に対する呼びかけの中に数多く引用されるようになる。⁽⁶⁾しかし、Mahādeva という名のみで崇拝を受ける場合も少なくない。例えば Mahādeva が男の子の生れることを願って祈られ、Śankara (福利をもたらすもの)、Devadeva (神々の中の神) と呼ばれたり、Nīlagrīva (青い首をもてる者)、Jaṭādhara (結髪者) という異名を付され、神々の帰趣 (devānām gati) であるなどと言われたりする。⁽⁷⁾ こういう場合は明らかに Mahādeva は Śiva を指している。

Mahādeva がまれに同じくヒンドゥーの主要神である Viṣṇu のタイトルとして用いられる場合もあるが、Śiva 神の異名とされる場合の方がより一般的である。⁽⁸⁾

さて、われわれのテーマと関連して特に注目されるのが、Bhāgavata Purāṇa (Burnouf ed. VIII. 7. 18~22) に載る記事である。それは有名な「乳海の攪拌」(Kṣīrābdhi-mathana) の神話の中に見られるものであるが、次の如き内容である。

- (18) 大海の攪拌に動転した魚・マカラ (un-makara?)・蛇・亀・鯨・象・わに・怪魚 Timiṅgila らの動乱 (ākula) によって、Hālāhala と名づく極めて有害なる毒が生じた。
- (19) その洪濤 (ugravega) がいたる処で攪乱し、広がり行き、抵抗しがたき勢力を (もつのを見て)、驚ける人々は正に守護なきもの (araksya-māna) となって、主人たちと共に Śiva に救いを求めて走った。
- (20) その神々の主 (devavara) を見て、聖者 (muni) たちは礼拝する。三界の安寧 (bhava) のために、女神 Devī と共に山頂に坐り、窮極の幸福 (apavarga) のために苦行をなせる者を、juṣāṇa なる語を含む祭詞の賛歌 (stuti) でもって人々は敬礼する。
- (21) 神々の中の神 (devadeva), Mahādeva よ、生類の魂 Bhūtātman よ、生類に安寧をもたらすもの Bhūtabhāvana よ、我々を避難処に入らしめ (śaraṇāpanna), 三界を焼き尽す毒より救いたまえ。
- (22) 汝は唯一なる一切世界の主宰者 (Īśvara) であり、(人々を) 繫縛より解脱せしめる者 (bandha-mokṣaya) である。善巧なる (kuśala) 人々は、(人々の) 苦痛の除去を達成した (prapanna-artihara) 師 (guru) として (汝を) 称える。⁽⁹⁾

ここの文章は、たしかに前述の Bharhut の彫刻図と必ずしも符合しない。しかしながら、Mahādeva が Timiṅgila 等の出した毒に恐れ戦く人々から、

救い主として要請されている点は看過し得ない。何故なら、Mahādevaとは仏典中において、祈っても益なしとされた神々の中で最初にあげられる神、すなわち Śiva に他ならないことが判明するからである。

このようにみて来ると、仏陀を Mahādeva と呼んだこと自体、更に Śiva を始めとするヒンドゥーの神々への祈願を、何ら意味のないものと説く仏典の態度は、いかにも作為的なことが感得される。そこには仏教の主尊なる仏陀への信仰こそが、ヒンドゥーの神々へのそれを凌駕するものだ、という主張が秘められている。しかし、このような意図は、仏典を創作し、読み伝えた人たちは別としても、一般大衆の信仰のあり方においては、どれだけの意味をもっていたか、となると疑問なしと言えない。Bharhut Stūpa は碑文の記すところによれば、⁽¹⁰⁾ 仏教を弾圧し、バラモン教を復活させたと伝えられる Śuṅga 王朝下で作製されたものとされる。このような状況にあって、仏陀がバラモン乃至ヒンドゥー的な名で呼ばれたという事実は、極めて示唆的と言うべきであろう。

これに関連して注目されるのは、時代が大分下るが、南インドの仏教遺跡として有名な Amarāvātī の近くにある、ヒンドゥーの Amareśvara 寺院の南門の柱に刻まれた碑文である。これは Śaka-saṃvat 1104年(A.D.1183)に、Keta IIという王が、自分自身及び彼の祖先は Śiva-Amareśvara 神の信者であって、バラモンたちに数多くの村落を贈っていながら、同時に「神なる仏陀」 Buddha - Deva, 或いは「聖なる神・仏陀」 Śrīmad - Buddha - Deva に対しても、三つの村落と110頭の羊、それにその羊の乳で ghee を作り永遠に灯すようにと、二つのランプを寄進したことを記すものである。また彼の妻である Gasavi-Sūramadevī, また別の夫人と考えられる Prola-madevīによっても、やはり Śrīmad-Buddha-Deva のために55頭の羊と一つのランプの贈られたことが明らかにされている。⁽¹¹⁾

この碑銘はヒンドゥー教と仏教との共存関係、仏陀がヒンドゥーの神と共に Deva として、回教徒侵入後も崇拝されていたことを示す貴重な資料と言える。先の Bharhut Stūpa の彫刻及び碑文は、いわば仏教が弾圧され乍らも、隆盛に向いつつある時代に属するものであったのに対して、この Amareśvara 寺院のそれは、仏教が衰微し滅亡せんとする時代の事情を示すものである。時代の上からのみならず、場所的にも大分距離があるが、両者はともに、インドにおける仏陀に対する信仰——Viṣṇu ではなくて Śiva として——のあり方の一面を教示するものとして注目に値しよう。

●(注)

- (1) Mahāvyaṭpatti 3582 に Mahādeva なる語が見えるが、転輪聖王の名の一つであり Pāli の Jātaka (No.9) などに登場する Makhādeva 王と同一と考えられ、仏陀の前身の名であっても、当該の問題とは関連をもたない。
- (2) Atharva Veda (ed. V. Bandhu) V. 21. 11~12; XIII. 4. 4. 牛の讃歌の中にも Mahādeva が出てくる。IX. 7. 7; XI. 2. 24; XII. 5. 19. cf. J. Gonda, Die Religionen Indiens I. Veda und älterer Hinduismus. Stuttgart 1960 S.85. 宇宙の主としての Mahādeva (Śiva) の観念はインダス文明の中にもあったとされる。辛島昇・桑山正進・小西正捷・山崎元一共著『インダス文明—インド文化の源流をなすもの』(日本放送出版協会, 昭55) pp.197~198.
- (3) Āśvalāyana-gr̥hyasūtra (ed. N. G. Apte) IV. 9. 17. cf. SBE. Vol. XXIX. Pt. 1. p.256 (番号は IV. 8. 19), 岩崎真慧「Rudra と Śūlagava 祭—Gr̥hyasūtra の神々 1—」(『印仏研』12-2, 昭39) pp.40~46. N. N. Sharma, Āśvalāyana Gr̥hyasūtram. Delhi 1976. pp.137~138; 207.
- (4) Kauśika-sūtra (ed. M. Bloomfield) 51. 8. cf. W. Caland, Altindisches Zauberritual. Wiesbaden 1967. S. 177.
- (5) Viṣṇu-purāṇa I. 8. 3~4.
- (6) MBh (Critical Ed.). 14. 8. 23.
- (7) MBh. 3. 40. 57 n. 174; 5. 189. 4.
- (8) MBh. 3. 84. 147; 5. 10. 10. cf. V. Fausböll, Indian Mythology. Varanasi 1972. pp.151~159. E. W. Hopkins, Epic Mythology. Ind. Repr. Delhi 1972. pp.204; 219~220. J. Gonda, op. cit. S. 255. A. Daniélou, Hindu Polytheism. New York 1964. pp.193~194; 204~206.
- (9) Viṣṇu-purāṇa (Hindī -anuvādasahita by. S. M. Gupta, Gorakhpur) I. 9. 97 では、乳海の攪拌で毒が生じたが、それは Nāga らによるものとされ、Timiṅgila や Śiva への祈願についての言及はみられない。また MBh. I. 16. 1~40 においては、kālakūṭa と名づく毒が出たが、Timiṅgila は登場せず、Śiva が三界をその毒から救うべく、それを呑み込んだこと(それによって Nilakaṇṭhaの名を得る)を記すのみである。この部分は Critical Edition では脚注274に載る。乳海攪拌の神話については、cf. V. Mani, Purāṇic Encyclopaedia. Delhi 1975. pp.31~32. 尚、Bhāgavata Purāṇa は 仏教との関連が数多く認められると言う。岩本裕『仏教説話の伝承と信仰』(『仏教説話研究』第三巻, 開明書院, 昭53), 109頁参照。
- (10) H. Lüders, op. cit. pp.11~12. A1 (687); pl. I. Suga (Śuṅga) 王朝の治世に塔門 (torāṇa) と石造物(即ち彫刻, silākammata) が Dhanabhūti という名の人物によって造られ、寄進された (upamāna) ことを記す。静谷正雄, 前掲書, 17頁。No.187 参照。
- (11) E. Hultzsch, Two Pillar Inscriptions at Amaravati, Ep. Ind, Vol. VI. 1900~1901, pp.146~160. D. Mitra, Buddhist Monuments. Calcutta 1971. p.201

4

以上、仏陀が Deva と呼ばれた事例を Bharhut 及び Amarāvātī の彫刻、碑文から見て来たが、特に前者に関しては、称名念仏の問題とも絡んで、興味ある内容を包含していることが指摘されよう。先に示したごとく、仏典のいくつかは、称名念仏の大利益あることを示す例証として、この話を引用していた。もしも Bharhut Stūpa の製作された頃 (B.C.100年頃) に、仏陀の名が災難からの救助を求めて唱えられたとすると、称名念仏の起源も大乘仏教興起以前に求められることになり、仏陀が一種の救い主としての機能を持つに至ったのも、そう新しいことでなかったと言えそうである。ここには、『法華経』第24章 Samantamukha-parivarta (観世音菩薩普門品) の中に見られる、「海の難処や Nāga, Makara, Sura, Bhūta (などの怪物の) 住処(ālaya) に陥ち込んだとしても、Avalokiteśvara [観自在菩薩] を念ずれば、決して海中に沈むことはない。」⁽¹⁾といった信仰のあり方の祖型をみることが出来る。

更に興味ある点は、この話が『旧約聖書』のヨナ書に類似することである。⁽²⁾

ヨナはニネベに行くようにとの主の命令に逆らって、タルシシに行こうとして船に乗るが、途中暴風に遭う。水夫たちは恐れて各自自分の神を呼び求める。船長はヨナにも神に祈るよう勧めるが、これが主の怒りによるものであることを知っている彼は、自分を犠牲として海に投げ入れるように頼む。水夫たちがその通りにすると、海は沈まる。主は大きな魚をととのえて、ヨナを呑み込ませた。ヨナは三日三夜魚の腹の中に居って、そこから神・主に祈るが、最後に主の命によってヨナは陸地に吐き出された、というものである。

このように、魚によって英雄が呑み込まれるという神話や伝説は、神話学上「ヨナ・モチーフ」とか「ヨナ型説話」という名で呼ばれ、世界的な分布が認められるが、大体太平洋をめぐる地域に多いとされる。⁽³⁾しかし、われわれの関心は、そうした英雄の怪魚からの脱出物語ではなくて、神々への祈願というところにある。ヨナの物語中にも、そうした祈願のモチーフが含まれていることが知られるが、もしそれが汎世界的なものであるとするならば、Mahādeva という呼称も再検討する必要があることになろう。何故ならば、Mahādeva とは元来固有名詞ではなくて、単に「大いなる神」という意味の普通名詞にすぎないからである。また物語の上でも、ヨナの話と先にみた【5】の例との間には、わずかながらも類似点のあるのも見逃せない。この

物語が純インド的なものなのか否か、⁽⁴⁾ 今後討究すべき側面のあることも指摘しなければならない。

このように、この Bharhut の一彫刻は、インドの造形的遺品の中では九牛の一毛にすぎぬものであるが、インド仏教文化史上のみならず、広く文化の比較研究の上でも、幾多の課題をわれわれに提供するものとして、極めて注目に価する素材の一つと言うことが出来よう。

●(注)

- (1) Saddharmapuṇḍarīka-sūtra (ed. by Vaidya). p.253. ll. 19~22. 漢訳「或いは巨海を漂流して竜・魚・諸の鬼の難あらんに、彼の観音の力を念ぜば、波浪も没すること能わざらん」坂本幸男・岩本裕訳注『法華経』(下)(岩波書店、第11刷、1978) pp.362~363.
- (2) この指摘は、宮城女子学院大学教授山形孝夫氏の御教示によるものである。特に記して謝意を表したい。
- (3) 大林太郎『神話と神話学』(大和書房、1975) pp.70~73. 同『神話の話』(講談社、昭54) pp.50~55. ヨナの物語とインドにおける商人の子 Mittavindaka に関する仏教的物語 (eg. J. Nos. 41; 439) との類似が指摘されるが(『カトリック大辞典』V. 富士山房、第4刷、昭37. pp.256~257), その詳細を明らかにし得ない。cf. J. Ginzberg, The Legends of the Jews. Philadelphia 1968. Vol. IV. pp.249~250.
関根正雄『旧訳聖書文学史』(下)(岩波書店、1980) pp.295~300参照。尚、当該の彫刻のテーマは Mittavindaka の説話とはあまり対比を求められない。
- (4) Cunningham の示す図 (pl. XXXIV, 2)によれば、舟に乗る人々の頭はちぢれ毛、或いはカールした頭髪で描かれ、異国人風に見られなくもない。そこで小野博士は彼らをギリシャ人とみた。小野玄妙、前掲書、pp.204~205. しかし、Cunningham のはスケッチと思われ、写真の如くターバン式の一般的なインド人の頭のタイプを示している。したがって、彫刻図の光景からは、インド外の事蹟と判断する材料は今のところ得られない。